東北地方におけるシャマニズムの社会精神医学的研究 青森地方におけるシャマンの分布

A social psychiatric Study on the Shamanism in Tohoku District in Japan.
On Distribution of Sherman in Aomori Prefecture

懸 田 克 躬 * 渋谷 百合子 * 前 田 栄 振 *
Katumi KAKETA, Yuriko SHIBUYA, Yoshinobu MAEDA,
中 村 民 男 * 田 島 臣 子 * 三 井 金 吾 *
Tamio NAKAMURA, Shinko TASHIMA Kingo MITUI

はしがき—研究の目標—

シャマニズムはシャマンによつていとなまれる特異な神事を媒介とする原始宗教の一形態である。わが国においても各地にみられ、その多くのものは祖先崇拜とむすびついている。しかしこのシャマニズムの中核をなすものがなんであるかは、これを問う立場がいかなる立場であるかに従つてさまざまに答えられている。

シャマニズムにおける中核的なシャマン行事の主体者たるシャマンは、わが国においてはイテコあるいはイタコあるいはミコとよばれていることが多い。これらのさまざまなシャマニズム的現象に共通にみられるものは、諸井りによれば、ある特定の人物、すなわちシャマン

が、特殊な場所において、ある観衆を前にし、みずからの随意的な作業発動、すわなち、特定の服装をなし、ある種の楽（大鼓、鈴その他鼓弓など）を用いて特殊な音調をかなで、歌および呪文などの特殊な語句を誦しているうちに、特異な身体的な変調があらわれきたつて、やがて且つ歌い、且つ踊るなどの行動を展開するようになり、やがて、特異な熱狂の状態になり、その結果は疲労困憊し、ついで意識混濁におちいり、その間に特異な言明あるいは表明を行うものであるという。

もちろん、われわれのシャマンに対する社会精神医学的な関心にとつて問題となるものには、その特異な精神状態の他にも、たとえばそのシャマンの社会的地位とか、それと周囲の人々との心理的距離とか、その家庭内関係、就任の過程、すなわち、彼らがなにゆえに精神の異常者としてではなく、特殊な能力をそなえたものとして、それぞれの社会に迎え入れられているのかなどさまざまなものがあるといつてよいであろう。もちろん、その中心となる関心または狭義の精神医学的な関心の向うものとしては、シャマンの異常心理ならびに一種の induziertes Irresein とみらるべき帰依者の異常心理、さらにはシャマンの修業過程とそのパースナリテイの交渉などが主たるものであるが、これとてもさまざまな方面にわたつているといわなければならない。

しかし、いまわれわれの第一次の関心は主として津軽地方にみられるイテコまたはカミサマとよばれ、大島におけるユタコに近いように思われる一種のシャマンと、それをめぐる同地方の農村の住民、主として農村婦人からなるひとびととの交流に社会精神医学的な照明をあて、みようとすることにあつた。このテーマはシャマンのいとなむ宗教的機能自体が複雑な要因をふくんでおるばかりでなく、しかも、青森県地方のいわゆるイタコもその居住地を異にするにつれてそれぞれに多少の差異があり、これを一律に扱うことは困難であるので、われわれは主として、下北群にある日本三大霊場の一といわれる恐山**にあつまるそれを対象としたのである。

* 順天堂大学医学部精神神経科学教室
1959年2月14日受付

** 恐山は正しくは宇曽利山で、あるいはアイヌ語のウシヨロの転訛であり溝または入江の義であるともいわれる。862年A.C（貞観4年）慈覚大師円仁によつて開かれ、比叡、高野とあわせて日本の三大霊場とよばれた。1457年寺は破却され荒廃に帰したが、1530年田名部町円通寺の開山聚覚和尚により再興、釜臥山菩提寺とあらため、爾来、曹洞宗の山となつている。この恐山は海拔2676尺、硫黄山であり、境内の諸所にガスがふき出、ために周辺の樹木は枯死し荒涼たる光景となつている。温泉は五湯あり、参詣者の入湯を可能にしている。

農民の伝承的信仰における恐山：恐山には地藏堂があり千体仏をまつている。この千体仏は亡き者のおもかげに会うことをのぞむものは、この堂に参じ、この千体仏をみるときにその中におのれのもとめる者の顔貌をみ出すことができるとされているばかりでなく、人間が死ぬときはその魂は恐山にゆくという伝承はひろく津軽、下北地方に行われ、恐山におけるイタコの仏おろしや賽の河原における死者との再会という異常体験の背景となつている。

—宇曽利百話による—

青森県内に居住する、イタコと呼ばれる巫女およびこれに類似する男女を対象とする私どもの研究は、その最終的段階において、現地でしたしくこれらの人々と面接して社会精神医学上の調査を行うことを必要とするものであるが、まずその第一段階として、これらの人々の、県内における分布状況や、心身的特徴、社会的機能、経歴等に関して概略的な知識を得る必要があると思われるので、私どもは、昭和32年以来 青森県下の市町村役場をわずらわして、各市町村におけるイタコおよび類似者に関する資料を収集することにつとめ、青森県内におけるその分布状態の調査からはじめて来た。

この報告は、こうして集められた報告をまとめたものであり、その他これらのシャマンに関する諸事実の記録は単なる資料の提供にすぎない*。

方 法

I 調査目的

青森県内に居住するイタコとよばれる巫女、ならびにカミサマその他の名称で呼ばれ、宗教的機能や特性が類似する男女を対象とし、県内における分布状況を調べ、また、イタコと類似者の異同を明かにする。

II 調査事項

A. 青森県内におけるイタコおよび類似者の分布調査。

B. イタコおよび類似者の諸特性や、宗教的機能を知り、両者の異同を明かにするための調査。

(予備調査) 昭和32年7月、現地に3名の調査員が赴いて、予備調査を行った。東津軽郡の平内町、南津軽郡の大鰐町および田舎館村、北津軽郡の板柳町、上北郡の七戸町および浦野館村、下北郡の田名部町、弘前市において、調査員が役場の人、土地の有志、イタコ等と面接して種々の事情を聴取した結果、調査事項Bの項目として適当と思われる次のような項目を撰択した。

イ. 土地における呼名

ロ. 性別

ハ. 心身の特徴—視力の状態ならびに日常の精神状態が正常か異常か

ニ. 経歴—師匠についての経験の有無と、奥伝または本

体の所持、不所持

ホ. 宗教的機能—仏おろし、または占いを行うか否か。

これらの調査項目については、該当事項を○で囲むような形式の簡単な調査票を作成した。

＜調査期間＞

調査事項A { 昭和32年1月～7月(前期)
昭和32年11月～昭和33年5月(後期)

調査事項B 昭和32年11月～昭和33年5月

III 調査方法

—調査事項 A—

1) 青森県下の市町村役場(昭和32年10月現在、6市64町村)宛、調査の依頼状と共に、所轄地域内に現住するイタコの氏名、住所、生年月日に関する調査票を郵送し、回答した上、郵便で返送するよう依頼した。

調査票の回収が遅れた場合は、往復葉書をもって督促しなおし、返信が得られなかつた数ヶ所は、現地の役場に調査員が赴いて、全部の調査票を回収した(前期)。

2) 現地調査の結果、青森県には、イタコの名称で呼ばれるものゝ外、カミサマ、ゴシソ(又はゴムソ)等の名称で呼ばれ、類似した機能を有するものが存在することがわかつたので、引きつゞき郵便による調査を行い、イタコ以外の名称の類似者が居住する時は、それらの者の氏名、住所、生年月日を追加して報告するよう依頼した(後期)。

以上のような理由で、調査対象の範囲が、イタコからイタコおよび類似者を含むものへと拡がり、従つて調査期間の延長があつたため、報告された人員に移動がみられた。

その経緯を記すと、前記調査期間には191名が報告されたが、後期調査期間には191名の中4名が死亡、2名が不明とされ、これに調査対象の範囲を拡げたため追加された83名を加えた合計268名が昭和32年10月から昭和33年5月の間に、青森県の市町村に現住するイタコおよび類似者として報告された。

—調査事項 B—

調査事項Aについて報告のあつた被調査者に対し、Bの事項に関する調査を行うため、前記同様の方法で、調査票を市町村役場宛重ねて郵送し、回答した上、返送するよう依頼した。

これも数回の督促のうえ調査票の全部を回収した。

巫女の分布

図1に示す通りである。青森県全体にわたつて分布し

* 社会精神医学の研究は、対象者の居住する地方の社会的構造や、歴史的、文化的背景に目をとめて、これらの条件の考慮のもとに、現象の考察をすすめてゆくべきであることはいふまでもないが、現在までのところこの方面に関する調査は未だ完了していない。

図 1

ており、その総数は268名である。その内訳は、表1に示すように、イタコの名称で呼ばれるもの136名、カミサマ122名、その他の名称のもの10名である。

東津軽郡、西津軽郡、中津軽郡および下北郡では、カミサマの名称で呼ばれるものが多いが、他地域では種々の名ものが混在しており、八戸市や三戸郡では、イタコの名称で呼ばれるものが圧倒的に多い。

県内におけるイタコ、カミサマ、その他の名称のものを含めた分布状況を概観すると、ごく大まかにいって、分布の密度の高い二つの地域が考えられる。その一つは、八戸市を中心とする三戸郡、上北郡を含む地域であり、他は弘前市に隣接する南津軽郡の町村である。県内で、津軽のイタコ、南部のイタコと区別して呼称されているのは、両地域の巫女をさす謂であろう。

分布の実数からみると、市では八戸市の25名が最も多く、黒石市の3名が最も少い。郡では上北郡の60名が最高で、最低は中津軽郡の8名であるが、人口との比較の上で判断を下す必要がある。

(人口に対する比率) 県下各市町村毎に、被調査者数が人口に占める割合を調べてみた。これを市、郡の別に分けて示すと表2のようになる(人口は、昭和30年国勢調査報告による)。

表1 イタコおよび類似者の分布

地 域	イタコ	カミサマ	その他	計
市				
青森市	11	7		18
弘前市	9	3		12
八戸市	23	2		25
黒石市	3			3
五所川原市	4	6		10
十和田市	2	7		9
計	52	25		77
郡				
東津軽郡	3	15		18
西 〃 〃	1	17	1	18
中 〃 〃	1	7		8
南 〃 〃	11	12	4	27
北 〃 〃	7	2	1	10
上北郡	34	25	1	60
下北郡	6	11	2	19
三戸郡	21	8	1	30
計	84	97	10	191
総 計	136	122	10	268

県人口の全体からみると、イタコおよび類似者数の人口に対して占める割合は、凡そ1万人に2人の割合であ

表2 イタコおよび類似者数の人口に対する比率

地 域		人 口	イ タ コ 及 類似者数	人 口 比 (1万人に 付)	順 位
市	青 森 市	188,532人	18人	0.9人	4
	弘 前 市	148,503	12	0.8	5
	八 戸 市	145,787	25	1.7	3
	黒 石 市	41,607	3	0.7	6
	五所川原市	45,158	10	2.2	1
	十和田市	42,827	9	2.1	2
	計	612,424	77	1.2(平均)	
郡	東 津 軽 郡	61,528	18	2.9	3
	西 々 々	102,010	18	1.7	7
	中 々 々	25,452	8	3.1	2
	南 々 々	119,841	27	2.3	5
	北 々 々	87,338	10	1.1	8
	上 北 郡	161,758	60	3.7	1
	下 北 郡	96,469	19	1.9	6
	三 戸 郡	115,701	30	2.5	4
	計	770,097	191	2.4(平均)	
総 計		1382,551	268	1.9(平均)	

る。

市と郡に分けてみると、市では平均1万人につき1.2人、郡では2.4人で、郡は市の約2倍の割合を占めている。

市の中で、もつとも比率の高いのは五所川原市であり(実数の最高は八戸市)、反対にもつとも比率の低いのは黒石市(実数も最低)である。同様に郡の中でもつとも比率の高いのは上北郡(実数も最高)であり、もつとも比率の低いのは北津軽郡であつて、実数の最も少なかった中津軽郡は、人口の割合にすれば、1万につき3.1人であつて、郡としては第2位の高い比率を占めている。

更に町村毎にこれをみると、東津軽郡今別町が1万人につき(以下略す)7.3人で県内での最高であり、上北郡の浦野館村の7.1人、同郡野辺地町の7人がこれに次ぐ。イタコおよび類似者の人口に対する比率の高い方から、2, 3, 5, 6, 10位を占める町村は、何れも上北郡内にあり、1, 7, 9位は、東津軽郡内の町村によつて占められている。

以上の調査によつて、都市と町村では、イタコおよび類似者の人口に対する比率が異なり、又町村でも地域によつて、その比率が違ふことが明かにされたが、それがどのような理由に基くものであるかは今後の調査にまたねばならない。

巫女の特性

I 性別と年齢別

イタコ、カミサマ、その他の名称のものの年齢構成を図示すると、図2のようになる(年齢は昭和33年1月1日現在の年齢である)。

図2 イタコおよび類似者の年齢構成

すなわち、各名称のものを通じ、50才代のものがもつとも多く、60代、40代がこれに次ぐ。明治21年から大正6年の間に生れたこれらの年代のイタコおよび類似者数は、全体の78%をしめている。その数からいえば僅少であるが、昭和の年間に生れた20才代のものも存在し、もつとも若いのは昭和7年生れの25才のイタコである。

性別では圧倒的に女性が多く、イタコでは98%、カミサマでは87%を占めており、これは表3に示すように、どの地域でもみられる事実である。男性のイタコは、南津軽郡浪岡町、下北郡東通村、弘前市に各1名づつ計3名が県内に居住するにすぎない。

カミサマも女性が多いのであるが、男女のカミサマの居住する39の市町村の中、南津軽郡尾上町には男のカミサマのみ居住するが、他の29の市町村では女のカミサマのみ居住しており、9つの市町村では男女のカミサマが共存している。

II 身体的特徴(視力障害の状態)

表4に示すようにイタコは、その大半(77%以上)が、盲または半盲であり、眼の開いているものは、その17%である。

カミサマは逆に、その82%が開眼者であり、盲は7%にすぎない。

表3 イタコおよび類似者の性別

性別	地域	市						郡							合計	%	
		青森市	弘前市	八戸市	黒石市	五所川原市	十和田市	東津軽郡	西 〳〳	中 〳〳	南 〳〳	北 〳〳	上北郡	下北郡			三戸郡
イタコ	男女		1								1			1		3	2
		11	8	23	3	4	2	3	1	1	10	7	34	5	21	133	98
サカマミ	男女	2		1		1		2	1	4	2		3			16	13
		5	3	1		5	7	13	16	3	10	2	22	11	8	106	87
その他	男女										1		1			2	20
									1		3	1		2	1	8	80

表4 イタコおよび類似者の眼の状態

		市						郡							合 計	%	
		青森市	弘前市	八戸市	黒石市	五所川原市	十和田市	東津軽郡	西 々 々	中 々 々	南 々 々	北 々 々	上北郡	下北郡			三戸郡
イ タ コ	開眼	5	5								3	1	8		1	23	17
	半盲	3	1	9	1			1	1		2	1	8	2	9	32	23
	盲	3	3	19	2	1	2	2		1	6	5	18	4	7	74	54
	不明			1		3									4	8	6
カ ミ サ マ	開眼	6	3	1		5	7	13	12	5	9	1	22	10	6	100	82
	半盲	1						1	3	2			2		1	10	8
	盲			1		1		1	2			1		1	1	8	7
	不明										3		1			4	3
そ の 他	開眼								1		4	1	1			7	70
	半盲													2	1	3	30

イタコに盲者または半盲者の多いことは、青森市、弘前市及び上北郡野辺地町を除いた県内すべての市町村に共通のことであり、カミサマに開眼者の多いことは、県内何れの地域にも例外がない。

こゝに半盲と称したのは、隻眼または弱視のため視力の通常でないことを意味したのであるが、視力は熟知せぬ第三者に判定のつかないこともあろうから、回答の不明の場合が少数あった。

III 日常の行動

表5に示すように、イタコ、カミサマ、その他の名称のものを合せ、その99%が正常と報告されている。彼らの日常の行動についての非専門家による判断はその者がはたからみて極端に異常な行動を示すのでない限

り、しばしば信をおききたいが、イタコやカミサマが、いわゆる神がかり状態にある時は別として、日常生活場面においては、精神異常者として扱われてないようにみえる。

IV 経歴（師匠についての経験の有無）

表6に示すように、イタコでは、その80%が師匠について修業した経験をもつよう報告されているが、カミサマでは半数以下（43%）の者しかこの経験をもたない。

イタコの大多数が師匠についての経験をもつことは、地域を問わぬ事実であるが、カミサマの場合は、地域によつて師匠について、つかなかつたりしている。また、9つの市町村では、師匠についての経験者と、経験の無い

表5 イタコおよび類似者の日常の精神状態

日常の行動	地域	市						郡							合 計	%	
		青森市	弘前市	八戸市	黒石市	五所川原市	十和田市	東津軽郡	西々々	中々々	南々々	北々々	上北郡	下北郡			三戸郡
イタコ	正常 異常	11	9	23	3	4	2	3	1	1	11	7	34	6	18 3	133 3	98 2
サカ マミ	正常 異常	7	2	2		6	7	15	17	7	12	2	25	10 1	8	121 1	99 1
その他	正常 異常								1		4	1	1	2	1	10	100 0

表6 イタコおよび類似者の師匠についての経験

師匠について た経験	地域	市						郡							合 計	%	
		青森市	弘前市	八戸市	黒石市	五所川原市	十和田市	東津軽郡	西々々	中々々	南々々	北々々	上北郡	下北郡			三戸郡
イ タ コ	有 無 不明	9 2	6 1 2	23	3	4	2	2 1		1 1	7 3 1	7	26 7 1	5 1	14 3 4	109 18 9	80 13 7
カ ミ サ マ	有 無 不明	2 6	1 1 1	2		1 3 2	7	3 12	4 13	4 3	9 2 1		12 2 1	6 4 1	2 3 3	52 61 9	43 50 7
そ の 他	有 無								1		4		1	2		3 7	30 70

ものが、同一市町村内に共存している（東津軽郡 今別町、西津軽郡 木造町、中津軽郡 岩木村、南津軽郡 大鰐町、上北郡 大沢町並びに天間林村、青森市、弘前市、五所川原市）。

その他の名称のものでは、カミサマ同様師匠についての経験をもつものが少い。

註．修業の例については別に発表の予定

（奥伝または本体の所持） イタコおよび類似者の中には、土地の人から奥伝または本体と呼ばれている物体を所持しているものが、かなりいるようである。

奥伝とか本体とかいうものゝ正体が何であるかは明かでないが、或は神体かもしれない。巻物であるという説もある。

イタコが仕事に出歩くとき、円筒形の袋に入れたものを大切に背負って歩くのを、現地においてたまたま見かけたことがある（下北郡 恐山の祭礼に於て）。これ

がいわゆる、奥伝または本体とよばれるものであるが、筒の中に何が入っているのかはイタコに聞いてもいわず、また、もちろんのこと、見せてもくれることもしない。

上北郡の浦野館村では、これを「おだいず」と呼んでいたが、土地の人の話によると、一定の修業期間を終えたイタコが、修業完成のしるしとして師匠から授けられるものだそうである。

しかし、調査結果によれば、師匠につかないイタコの中にはあるようであるし、また師匠についての経験のないカミサマの場合、本体とか奥伝とか云うものがどのような経路によりえられ、またいかなる意味をもつものかは明かでない。

奥伝または本体の所持についての調査の結果は表7のようになった。

即、イタコ、カミサマ、その他の名称のものを通じ

表7 イタコおよび類似者の奥伝または本体の所持

本体の所持は	地域	市						郡								合計	%
		青森市	弘前市	八戸市	黒石市	五所川原市	十和田市	東津軽郡	西津軽郡	中津軽郡	南津軽郡	北津軽郡	上北郡	下北郡	三戸郡		
イタコ	持	6	6	15		3	2	2		1	8	3	30	5	8	87	64
	不持	5	4	4	3	1		1	1		2	4	3		8	36	26
	不明		1	4							1		1	1	5	13	10
カミサマ	持	4	2	1		2	7	11	9	6	8		21	5	6	82	67
	不持	3		1		2		4	8		2	2	1	6	2	31	26
	不明		1			2				1	2		3			9	7
その他	持										4		1	2		7	70
	不持								1			1			1	3	30

て、その6〜7割のものが奥伝または本体を所持している。

(この経歴に関する調査事項である師匠についての経験の有無や、奥伝または本体の所持、不所持は、外見上たやすく分ることもあるため、回答の不明の場合があった。)

イタコとカミサマの宗教的機能

イタコの社会的機能は幾つかあるが、その主なものは宗教的機能であると思われる。

イタコをこの地方に伝統的なものとして存続させ、今日でも、居住地の住民の間に存在の理由をもちえているのはイタコのもつ宗教的機能であろう。

イタコはシャマンの一種であり、従って、巫女一般のもつ機能である口寄せ、予言や占、治療等は、イタコの仕事の中に入るようである。イタコが師匠について修業するの、厳しい訓練を通じて、超自然と交通する人としての資格を得るために外ならない。

カミサマと呼ばれる人の中にも、その経歴において、師匠について修業した経験をもつものがあり、また、多くの者が奥伝、本体などを所持する点で、イタコと極めて類似しているように思われる。

開眼者がそのほとんどを占める点では、盲または半盲者の多いイタコと相違するが、女性に多いという点では、カミサマもイタコと同様である。

青森県内には、地域によってイタコとカミサマの分布に偏りがあることは、調査結果として先に述べたが、このことは同種の対象をさして、地域によって異った呼び方をするのではないかという疑問をおこさせる。果して

イタコとかみさまは区別のないものであろうか、イタコをイタコと呼ばせ、カミサマを男女の別なくカミサマの名称と呼ばせるものは何であろうか。

彼らの宗教的機能の中、その主な仕事である仏おろしと占を取上げて、両者について比較してみたところ、調査の結果は次のような数字を以て、イタコとカミサマの機能における分化の程度を示している。

(仏おろし) 巫呪によつて、死者の霊を呼び出すことを仏おろしといい、霊媒者(イタコ)の身にかゝらせて物語りするところからか、口寄せともいつている。

表8に示すようにイタコでは、その94%のものが仏おろしを行うが、カミサマで仏おろしをするものは50%に止まる。その他の名称のものも、行うものといわぬものと半々である。

仏おろしをしないイタコは、青森県全体に居住するイタコ(136名)の中、僅か3名にすぎず(青森市、弘前市及び三戸郡名川町に各1名)、しかもその中、名川町に住む1名は老令のため仏おろしを行わないと附記されていたから、仏おろしはイタコの重要な機能といつてよからう。

カミサマの居住する県内39の市町村の中、カミサマが仏おろしをする処は16町村あり、しない処は11市町村ある。仏おろしをするカミサマとしないカミサマが混在する市町村は11あった(不明1)。

註。仏おろしの例については別に発表の予定

(占) 巫呪によつて、吉凶の判断をすることを占というが、これもイタコやカミサマの宗教的機能の中、主だったものとなつている。

さきゆきの幸、不幸などの占のほか、失せ物(紛失

表8 イタコおよび類似者の仏おろしの実施

地域 仏おろし		市						郡							合 計	%	
		青森市	弘前市	八戸市	黒石市	五所川原市	十和田市	東津軽郡	西々々	中々々	南々々	北々々	上北郡	下北郡			三戸郡
イ	す	10	9	22	3	4	2	3	1	1	11	7	34	6	15	128	94
タ	しない	1		1											1	3	2
コ	不明														5	5	4
カ	す	3	1	1		2		5	10	1	8		17	10	3	61	50
ミ	しない	4	1	1		3	7	9	7	6	3	2	7	1	3	54	44
サ	不明		1			1		1			1		1		2	7	6
マ																	
その他	す								1		1			2		5	50
	しない										3		1		1	5	50

物)があつた時に、何時、どの方角から出るかなどというこも、この中に入る。また占には、個人や家族に関するほか、農作物の出来、不出来や、牛馬が見えなくなつた時の占等もある。

病人が出たり、悪事災難があつた場合にその原因を占つて貰うことも屢々あるようであるが、これはイタコやカミサマの他の宗教的機能である治療にもつながる。

占に関する調査結果は、表9のようになった。すなわち、カミサマでは、その92%が占を行うが、イタコで占を行うものは76%であり、その他の名称のものも7割が占をする。

このように占は、イタコにも類似者にも共通してみられる仕事であるようだが、カミサマの場合には、そのほ

とんどのものが占を行うのに較べれば、イタコは仏おろしの方を専門とし、占は必ずしも全部のものが行わないようである。

イタコとカミサマの相違

以上述べて来たように、イタコとカミサマでは次のような特性上の異同がみられる。

イタコはその大部分が盲女であり、宗教的機能としては、仏おろしを主に行うが、占もする。そして巫女としての資格を得るために、師匠について修業するものが多く(修業完成のしるしとして)、奥伝または本体といわれるものを所持している。

カミサマは女性に多いが、その大方が開眼者であり、

表9 イタコおよび類似者の占の実施

地域 占		市						郡							合 計	%	
		青森市	弘前市	八戸市	黒石市	五所川原市	十和田市	東津軽郡	西々々	中々々	南々々	北々々	上北郡	下北郡			三戸郡
イ タ コ	する	5	3	22	3	4	2	3	1		10	4	31	5	10	103	76
	しない	3	6	1						1	1	3	3	1	5	24	18
	不明	3													6	9	6
カ ミ サ マ	する	7	3	1		6	7	15	14	6	9	2	24	11	7	112	92
	しない								3	1	3					8	6
	不明												1			2	2
そ の 他	する								1		3	1	1	1		7	70
	しない													1	1	3	30

主な宗教的機能は占を主とするが、仏おろしも行う。その6〜7割のものが、奥伝とか本体を所持しているが、師匠についた経験のあるものは、その半数にみえない。

イタコもカミサマも、日常の精神状態は正常とみられている。

その他の名称のものというのは、名称を記入していない3名と、南津軽郡の平賀町及び尾上町に住むゴミソ、上北郡大三沢町のベツト、北津軽郡市浦村の霊友会、下北郡脇野沢村の三夜様と呼ばれる7名を合わせた計10名である。これらの名称のものは、すでにみてきたように、その特性や機能において、カミサマと類似した傾向をもっている。南津軽郡大鰐町では、カミサマのことを別名ゴミソというとして附記されていたが、カミサマとその他の名称のものゝ区別は明かでない。

表10 イタコおよび類似者の居住形態
イタコおよび類似者の居住形態と市町村数

居 住 形 態	イ タ コ	カミサマ	そ の 他
単 存 市 町 村	18	20	1
共 存 市 町 村	22	19	7
不 在 市 町 村	30	31	62

共存市町村に於ける組合せ

イタコ+そ の 他	4	22
イタコ+カミサマ	16	
イタコ+カミサマ+その他	2	19
カミサマ+その他	1	

数字は市町村数を表す

これらの異なる名称のものは、単独で存在するか、または一緒になつて居住するかを市町村毎に調べてみると、表10に示すように、共存する市町村数の方が、単存する処の数よりも稍多く、共存する22の市町村の中、16市町村では、カミサマとイタコが共存するよう報告されている。

これによつても、イタコとカミサマが、その呼名が異なるように、土地の人々から異つた存在として認識されていることがうかがわれる。

総 括

青森地方におけるシャマンであるイタコならびにカミサマの分布についての調査結果を報告し、あわせて恐山を中心とするイタコと農民の交渉を附記した。

附 記

イタコやカミサマの宗教的機能を理解するには、イタ

コやカミサマが居住地（部落）においてどのような場合に、どのような人々から依頼されて巫女としての機能を果たすか、その具体例を知ることが必要であると思われる。

イタコやカミサマと住民の関係については、今後更に綿密な調査を行う予定であるが、昨年7月予備調査を行った際に、県内数ヶ町村において、土地の人々から種々情報を聴取したので、日常生活場面におけるイタコやカミサマと住民の関係についてそのおよその有様を知ることができた。この時に得た情報に基いてイタコやカミサマの宗教的機能に関係のある例を次に示すこととする。

〔部落における巫女と住民の関係〕

1. 上北郡の浦野館村は人口11,221人に対し、7人のイタコと1人のカミサマが居住し、これらの者の人口に対する比率が県内で第2位をしめている農村である。村内の大浦部落の老人たちの話によると、部落では春秋の彼岸に女の人が、近在のイタコの家を訪ねて仏おろしをしてもらう。中には事情の知れない遠方に住むイタコをわざわざ訪ねる者もある。特に春の彼岸には仏おろしのついでに家族1年の災難を占ってもらうため、殆ど一軒から1人位の割合でイタコの家に出かけて行く。これは部落の習慣のようになっていて、おばあさん達の楽しみになつている。

また病気の時も住民はイタコのところへ相談に行き、特に子供の夜泣きや疳の虫の場合には医者より先に行く人もある。病人が出たときイタコに聞くと、どこの医者にかゝれとか、病気によつてはオシラ様に申し訳けすれば治るというようなことをいうこともある。イタコは病人を治すとき米をあげて祈禱し、米の10粒か20粒を薬として病人に与える。病気の占は、人間に関する占の外に、牛馬の病気の時の占もある。

失せ物（紛失物）がでたときイタコに聞くと、（盗つたのが）村の人だとか、そうでないとか、（出る方角が）東とか西とか教えるが、弊害が多いので聞く人は少い。

部落でイタコは大抵結婚生活を営んでおり、夫は失明者の場合ボウサマと呼ばれ、三味線をひき唄を歌つて、正月、節句、彼岸や、また祝儀の席などに呼ばれ貰いをして歩く。ボウサマには縄ばりがあるが、イタコにあるかどうか分らない。

イタコを信ずるのは中年以上の女の人たちで、この人たちは小学校の教育も満足に受けていない。

昔はイタコの子を叩くとたゞりがあると思われて恐れられていたが、今では部落内でイタコを特別扱いをするようなことはない。

この地方にイタコの多い原因として、元村会議員であった老人は、この地方は冬室内で薪をくべるので眼を悪くする者が多いこと。半年雪にとざされており、その上度々冷害に見舞われるので、農家が貧乏で眼の悪いものを医者にかけて治療したり、また学校教育を受けさせたりする余裕のないこと。このため盲人はイタコや貰いをして歩くより仕方のないこと等をあげていた。

また最近イタコの減った原因としては、盲が少なくなったこと。イタコを頼む人が減ったこと。新しい学校教育がイタコを迷信として取扱ったことをあげた。尚、イタコの最も盛んだつたのは終戦後行方不明者の多かつた頃であるという。

2. 南津軽郡大鰐町は人口 18,296 人に 3 人のイタコと 3 人のカミサマが居住する。この町は秋田県との県境に近い温泉地であつて、冬季はスキー場として知られており、農家数は全世帯数の 1/3 程度である。

大鰐町ではイタコの方が民家に招かれて行つて口寄せ（仏おろし）をする。仏をおろすついでに頼まれて占もする。イタコを招く集団は、本家分家関係の親戚や、隣近所の親しい者同志の集りである。ふつうお婆あさんが呼ぶのであるが、主人を失つた若い女の人が呼ぶこともある。裕福な家庭では自腹を切つて他の家庭を招くことがある。

大鰐町の町はずれに住むイタコ（半盲、58 才、独身の女）に面接したところ、イタコは調査員の質問に答えて次のように答えた。「仏おろしは春と秋の彼岸に行い、今（7 月）は、お祭りの時で神時（カミドキ）であるから仏おろしはしない。占は家でするより頼まれて外へ出かけてすることの方が多し。在の百姓に行くと、百姓から主に作のことを尋ねられてこれを占う。林檎の出来はどうかとか、虫はつかつかぬか、薬はどんなものを用い、水はどの位かけたらよいか。また稲は早手、中手、奥手の何れを植えたらよいか等を聞かれる。また春から秋にかけ何時雪が降るか、大風が吹くかといった気象に関する占や、病気の占もする。」

この町で住民がイタコを利用する時期は大体定つており、盆の入りから旧正月の前にかけて利用するが、その中でも冬が最も盛である。

これに較べ、カミサマは、イタコのように利用される時期が定らず、1 年を通じて占をし、またイタコのように集団から呼ばれることがない。

カミサマの本業は占で、体のことその他の占をする。カミサマの家には祭壇があり、特定の信仰をもっている。カミサマは大抵家にいて占をするが、占の相手が重

病人の時は自ら出向いて行く。

町内の若い人たちは、イタコやカミサマに無関心であるが、古い人たちは、イタコの口寄せや占を普通の行事のように思つており、呼ばなければ仏にすまないと思つている。

3. 南津軽郡の田舎館村は、人口 12,002 人にイタコ 1 人が居住する農村であるが、秋の収穫が終る頃、お婆あさん達が 5~6 人揃つて村の主だつた家にイタコを呼ぶ。持廻りで家にイタコを呼ぶことは女の人の老後のたのしみとなつている。イタコを家に呼ぶ場合は、祭壇にあげる分として 3 升 3 合、口寄せの分として 5 合の米を用意し、その他のお供えもする。またイタコの家へ行く時はお賽銭をあげる。イタコは縄ばりがある。

この村にカミサマは居住しないが、役場の人の見解によるとカミサマは占を本業とし、時には仏おろしをする。また病気の治療もする。カミサマの家には祭壇が設けてあり、民家の方から出かけて行く。キツネがつき病人が出たとき、住民はカミサマに払つてもらふという。

村民は日常イタコを気遣ひ扱いすることなどなく、普通の人に対すると同様の態度で接している。

若い人たちも、イタコを呼ぶことは年寄りのたのしみだと思つているので別に反対もしない。

〔恐山の参詣人とイタコ〕

下北郡にある恐山は日本の三大霊場の一つに数えられているが、毎年 7 月に行われる祭礼には、青森県内各地から多数の参詣人が集り、またこれを目あてに遠近に住むイタコが仏おろしを商売に出かけてくる。ふだんは農家の一員であり、また家庭の妻女としての身分にあり、このため他の部落民と大差のない存在であつたイタコの巫女としての機能が、恐山の祭礼という特殊の環境にあつては際だつて浮彫りにされてくる。従つて恐山の祭礼はイタコの宗教的機能を知るための好機であると思われる。調査員は幸いこの年 1 度の祭礼に参加したので、その時の観察記録をも附記して、イタコの宗教的機能を明かにする手がかりとしたい。

恐山は青森県の北端、下北半島のほぼ中央に位する 800 米余の死火山で、硫黄ガスが今尚噴出しており、温泉も湧き出ている自然の景観の地である。

恐山は現在我国三大霊山の一つに数えられて地藏尊を本尊とする曹洞宗の寺があつて、地方民の信仰の地となつている。

毎年 7 月 20 日頃行われる地藏尊の祭礼には、県内や遠く県外からも参詣人が多数集る。

青森県には古くから死者の霊が恐山に還るという民間

信仰があつて、このために参詣人は仏の供養をしに恐山まで出かけて行くのである。祭の頃丁度農繁期を終え一息ついた農民は、近在に住む親しい者同志誘い合せて、仏の供養をかねて温泉の湧き出る山頂まで登ってくる。

一見したところ参詣人は40～60年輩の女が多く、浴衣がけに白手拭をかぶつた軽装で、中には帯を締めていない若さもある。男の老人がこれに混り、稀には若い男女をみかけるが、参詣に來たのかどうかは分らない。

参詣人は国鉄田名部駅からバスに乗つて登つて來るが、山頂につくと塔婆をたて、本殿に詣で、仏の回向をすませ、龕の河原、血の池、三途の川、極楽浜等の名称のある寺内の各所で故人を偲ぶ。

イタコはこの時、本殿の軒下において参詣人の頼みに応じて一役を演ずる。参詣人に近親者の霊や遭いたいと思う仏を次々と呼出してやるのである。

客がイタコに仏の死んだ月日を告げると、数珠をすり歌うような調子で呪文を唱えはじめる。途中で男か、女か、永い患だつたか、戦死か等を聞く。そして霊が呼出せると数珠をやめ、調子も変つて語り聞かす様子となる。語り終ると数珠をすり最初の調子に戻つて終る。

参詣人は少い者で1～2人、多数では7～8人がイタコの囲りに輪になつてしやがみ、これを聞いている。中には涙を流して聞き入っている老婆もみられる。

どこからともなく漂つて來る硫黄の匂と、イタコの呪文の哀調、それに恐山全体の奇怪な山容が人々を異様な心理状態に陥入れるように思われる。

イタコにとって仏おろしは商売であるので、おろした仏1人につき50円を料金として客から貰う。客の方でもイタコを変えて何回も聞く者もあり、またあのイタコをと探している者もある。同じ部落のイタコに聞く者は却つて少いようである。

参詣人は寺の宿坊に泊る外、本殿や寺内の掘立小屋に

米や食糧を持参して泊り込む。昔は出身の部落によつて宿泊する小屋が定つていたということである。これらの人々は晩方そして早朝に、寺内に点在する浴舎で自由に湯につかり、農繁期の骨休めをすることもできる。

夜は、暗闇で盆踊りをする一団もあるが、これは自分たちが楽しみ、同時に仏を喜ばせることになるという。

また宵の中は、石油ランプや、自家発電によるほの暗い灯の下で、歌を歌い、また宿坊の床に空所を設けて、余興の踊に興じている人々もある。

イタコは早朝から暗くなるまで仏おろしをしているが、仕事を終えると参詣人がざこ寝している宿所の中に姿を消して行く。

調査員は祭礼期間の1日、寺内で仏おろしをしていた8名のイタコと面接したが、(彼女らは弘前市、五所川原市、北津軽郡板柳町、西津軽郡鰺ヶ沢町、上北郡浦野館村、下北郡田名部町から來た)その中、ある者は単身で、ある者は身内に連れられて恐山まで來たという。先に記した浦野館村大浦部落に住む老令のイタコは、近所の人に附添われて参詣かたがた來たということであつた。

恐山の祭礼時にもイタコは時として占をすることがある。カミサマがこの祭礼に來るかどうか明かでないが、原則的にはカミサマは参加しないようである。

恐山の祭礼に仏おろしをするイタコの数は年々減少する傾向にある。

青森県内の市町村役場のご協力に深く感謝する。

文 献

- 1) 諸井慶徳：シャマニズムにおける中核的内容の特質：宗教研究，153，77，1957。
- 2) 堀一郎：民間信仰：岩波書店，1950年。
- 3) 高木宏夫：ユタについて：宗教研究，146，21，1956。
- 4) 笹沢魯羊：宇曾利百話，昭和28年。

Summary

The results of social psychiatric survey on the sherman in Aomori prefecture are reported. In this prefecture live 268 sherman aged from 20 to 89. They are divided in two groups i.e. Itako and Kamisama, and their religious function and mode of its discipline are reported. Authors also pointed out various subjects of shermanistic problem, in which this survey is involved.

1

2

3

4

5

- 1) 恐山霊場全景
 2) 仏おろし中のイタコトきり手 1.
 3) 〃 〃 2.
 4) 〃 〃 3.
 5) 〃 〃 4.